

『大いなる遺産』に見られる ディケンズの父への思い

近藤 浩

I

『大いなる遺産』（1860-61）は、チャールズ・ディケンズの父親、ジョン・ディケンズの死後9年目に書かれはじめた作品である。ジョンが亡くなったのは1851年で、死亡時の年齢は65歳。その当時のディケンズの年齢は39歳であった。『大いなる遺産』の語り手であるピップ（本名はフィリップ・ピリップ）の年齢は34歳で、エイベル・マグウィッチの死亡時の年齢は約60歳である。『大いなる遺産』はマグウィッチの死後11年目にして語られる物語だが、語り手としてのピップと語り手が見つめるマグウィッチの年齢関係を見てみると、1851年当時におけるディケンズと彼の父親との年齢関係に、ある程度近くなっている。この点から考えてみると、ディケンズは、語り手ピップのマグウィッチに関する回想の中に、亡き父親に対する思いを描きこみたかったのではないかと、想像したくなってくる。

マグウィッチがピップにとっての父親的な存在として描かれている可能性はある。ディケンズは自分自身の作品の中に、父親の要素を取り入れた人物をしばしば登場させている。そのような人物は、すでにディケンズの最初の出版された作品『ポプラ通りの晩餐会』（1833）に登場していたそうである（Ackroyd, 13）。それ以降のディケンズの父親をオリジナルとする登場人物の例としては、『デイヴィッド・コパフィールド』（1849-50）のウィルキンズ・ミコーバーや、『リトル・ドリット』（1855-57）のウィリアム・ドリットを挙げることができる。ここで注目したいのは、『デイヴィッド・コパフィールド』にも『リトル・ドリット』にも、父親をオリジナルとする登場人物を観察する主人公が存在することである。ディケンズの自伝的小説と言われる『デイヴィッド・コパフィールド』では、ディケンズ自身をオリジナルとして創造された、タイトル同名の少年が登場し、語り手としてミコーバーに同情を寄せつつも、彼の金銭面におけるだらしなさや棚ぼた主義をありのままに読者に伝えてくる。そこには、やはり楽天主義で金銭感覚に疎かった父親に対する、少年時代のディケンズの批判が込められているのである。一方『リトル・ドリット』にはアーサー・クレナムが存在し、牢獄暮らしに甘んじるだけでなく、紳士気取りに没頭し、娘に負担を掛けてばかりいるウィ

リアム・ドリットに非難の目を向ける。この作品でも、クレナムの目線は、父親を見つめるディケンズの目線と重なる。父親は自分を紳士とみなしてはいたものの、貧乏暮らしに追い込まれ、借金が原因でマーシャルシー債務者監獄に投獄されたこともある。このことによって彼は、子供の頃のディケンズに惨めな思いをさせたのである。上に挙げた二つの長編小説からは、ディケンズの父親に対する思いが読み取れるのである。そして『大いなる遺産』には、ディケンズの父親をオリジナルとして創造されたとまでは言えないけれども、ピップに対して「わしはおまえの二番目の父親だよ。おまえはわしの息子なんだ 他のどんな息子よりもわしに近い息子なんだ」(304)と告げるマグウィッチが登場する。そんなマグウィッチに対して、主人公のピップは最初のうちは嫌悪の気持ちしか持てない。しかし、最終的にピップはマグウィッチを受け入れることになるのである。マグウィッチと、第二の父親を受け入れるピップ。この二人を父子に見立てることは十分可能である。ピップは、デイヴィッドに続くディケンズの「二番目の、そして控え目な自我」(Wilson, 35)とも言われており、ピップのマグウィッチに対する思いの中には、ディケンズの父親に対する思いも読み取れるはずである。

その読み取りが可能であれば、ピップとマグウィッチの関係から、ディケンズの父親に対する気持ちの変化を読み取ることもできるであろう。ディケンズがミコーバーとウィリアム・ドリットを自分の父親を素材として創造したことを考えると、ディケンズの父親に対する見方はかなり厳しいものと言わなければならない。『デイヴィッド・コパフィールド』を執筆していた頃のディケンズの年齢は37～38歳であり、彼が作家として頂点にさしかかっていた頃に当たる。物語はデイヴィッドが高名な作家になるまでを描いているのだから、ミコーバーのことを思い出している語り手としてのデイヴィッドの年齢は、この作品の執筆当時のディケンズの年齢とほぼ重なっていると考えられる。また『リトル・ドリット』執筆中のディケンズの年齢は43～45歳で、主人公のクレナムの年齢が約40歳であるから、作者と主人公の年齢は非常に接近している。したがって、これら二つの作品において、主人公がディケンズの父親のイメージを賦与された登場人物にいただく思いは、各作品の執筆当時のディケンズの父親に対する思いを反映していると言えよう。『大いなる遺産』執筆当時のディケンズの年齢は48～49歳である。ピップのマグウィッチに対する思いの中には、その年頃までのディケンズの父親に対する思いが反映されるはずだ。そしてその思いは、上に挙げた二つの作品から読み取れるものとは、趣を異にしていると予想できる。父親の死後9年も経過すれば、ディケンズの父親に対する気持ちも変化する。ましてやディケンズは、父親を憎んでいる一方で、父親を深く愛してもいた。ピーター・アクロイドの『ディケンズ伝』の中でも、この点は指摘されている。

もし彼が父親を崇拜していたとするなら彼は父親を軽蔑もしていた。しかし彼は自分自身の中に父親が存在していることも認めていて、自分がひどく悲嘆に暮れているときには、自分自身を哀れに思う気持ちが自分の父親になってくれた人への哀れみとなって溢れだした。彼は終始父親を咎めながら欲望と忘恩の人生を送ったが、父親が死んだ後になると、彼はいつも決まって「私の可哀相な父親」という表現を繰り返したのである。(Ackroyd, 14)

このようなディケンズであれば、彼の父親に対する気持ちが、父親の死後に和らいでいったことは間違いない。そしてその気持ちは、父親的な役割を持つ登場人物に対する主人公の気持ちの中に描きこまれるはずである。ディケンズが語り手としてのピップの年齢を34歳にし、その時点からピップに60歳代のマグウィッチを思い出させていることから、ディケンズが父親を亡くした時の心情に戻って、あらためて父親を見つめ直そうとしているように思われるのである。

II

まず、ピップとマグウィッチの出会いから二人の再会までの部分に織りこまれている、ディケンズの父親に対する思いを探ってみたい。

7歳のピップが住んでいるのは、テムズ川下流の沼沢地帯にある村であり、ピップはその村の教会墓地で初めてマグウィッチと出会うのである。この出会いに先立って注目しておきたいのは、ピップが初めて自分というものに気づいたことを示す記述である。

いろいろなものの正体について、私が最初に受けた最も鮮やかで、はっきりとした印象は、忘れないほど底冷えがする、ある日の夕方に近い午後に得られたように思われる。そのような時刻に、私はこのようなことがはっきりとわかったのである。つまり、いらくさが茂っているこの寂しい場所は教会の墓地であること、この教区の故人、フィリップ・ピリップ、及び上記の者の妻ジョージアナは、死んで埋葬されたということ、・・・そして何もかも恐ろしくなって泣きだしかけた、震えている小さな固まりはピップだということである。(1)

「この教区の故人」から「ジョージアナ」までは、ピップの両親の墓石に刻まれている碑文である。この引用の中で最も重要なことは、ピップが自分を荒涼とした世界の中に取り残された一つの小さな固まりに過ぎない存在だと認識したこと、すなわち、両親に先立たれ、この世にたった一人残された孤児だという自覚を持ったことである。ピップには20歳以上も年上の姉(ジョー・ガージャリー夫人)がいて、ピップの母親代わりを勤めているが、その手荒い養育方法のために、ピップは姉に親近感を持ってない。またピップは姉の夫ジョー・ガージャリーを慕っているが、ジョーはピップの父親代わ

りという地位を確立するまでには至らない。ピップは愚直なジョーを「大きな子供」(2)とか「自分と同等の人」(2)と考えており、大きな体に強い力を持ちながら妻に頭の上がらないジョーに、ふがいなさを覚えるのである。このような訳でピップは、一緒に暮らしている人間を持ちながらも、実質的には天涯孤独という認識に到達したのである。

ピップの天涯孤独感は両親を求める気持ちにつながる、と言ってもよいだろう。幼いピップが冷えこんだ夕方の時刻に、わざわざ寂しい墓地を訪れ、両親の墓を見つめ、見たことのない両親の姿を想像することからも、ピップが両親に会いたがっていることが感じられるからである。物語の冒頭に登場するピップは、親を欲する孤独な子供として描かれているのである。監獄船から脱走してきたマグウィッチは、ピップが自分の天涯孤独を悟った直後に、ピップの両親が眠る墓地の「墓と墓の間」(2)から、あたかも死んだ父親が甦るように現れてくる。そしてマグウィッチはピップが孤児であることを確認したのち、その子供に、足かせを切断するためのヤスリと、空腹を満たすための食べ物、家から持ってくるように命令する。マグウィッチは、約束を守って要求された品物を届けてきたピップに恩義を感じ、その子供の父親になる決心を固めるのである。マグウィッチがピップと結んだのは一方的な父子関係であるが、ともかく親を欲する孤独な子供の要求を満たしたことになる。その後のマグウィッチの人生は、ただひたすらにピップへの奉仕のために費やされていく。流刑囚として送られたオーストラリアで、懸命に働いて成功し、財産を築き上げたマグウィッチは、ピップを紳士にするための計画を実行する。この計画もまた、ピップの与かり知らぬ一方的なものである。しかしこの計画は、ジョーの家業を継いで鍛冶屋となる将来に幻滅しているピップにとって、紳士になりたいという熱望を叶えてくれるものとなる。そしてマグウィッチはピップが23歳に達するまで、名前を明かさずに、ピップが必要とするもの(十分な金銭、高価な衣装、紳士が受けるべき教育)を与えつづけるのである。

こうしたマグウィッチの援助は、ピップに対する純粋に父親的な愛情に基づいたものと言ってもよかる。マグウィッチがピップに遺産相続の条件として与えたことは、ずっとピップという名前を通すことのみである。ピップ(Pip)という名前は種を意味しており、この章の冒頭の引用の中で Pip = small bundle (小さな固まり) の関係として示されるように、小さなものというイメージを持つ語でもある。オーストラリアでの過酷な労働生活の中で、マグウィッチの脳裏に浮かんで、彼の励みになっていたのが子供のピップの姿であることを考えれば、マグウィッチがピップという名前に、自分の小さな子供という意味を込めていることは明らかであろう。マグウィッチはピップに自分の「息子」(304)でありつづけてほしいと願っているだけなのである。マグウィッチの愛情が父親的なものであることは、彼の言葉の中にも示される。紳士となったピップ

に再会したマグウィッチは、次のようにピップに言っている。

「そしてこれが」と、彼はパイプをふかし、私の両手を取って愛情を込めて上下に揺り動かしながら言った。「そしてこれがわしの作った紳士だ！正真正銘の紳士だ！お前を見ていると、実に気分がよくなって来るよ、ピップ。わしの望みは、おまえのそばにいて、おまえを見させてもらうことだけなんだ！」(313)

マグウィッチがピップに求めることは、ピップのそばにいて、自分が紳士に作り上げた「息子」(304)を、誇りを持って見つめることだけである。マグウィッチはピップに形ある見返りは何も求めない。マグウィッチの愛情は、父親が子供にいただくような無償の愛情なのである。

しかし、ピップは自分の恩恵者として再び姿を現したマグウィッチを受け入れることができない。自分の恩人を風変わりな金持ちの老婦人ミス・ハヴィシャムと信じていたピップは、自分を紳士にして遺産を相続させようとしていた人物が、かつて自分が助けた囚人に過ぎなかったことを知り、「失望と、危険と、恥辱！」(303)を感じてしまい、心の中で「おお、来てくれなければよかったのに！私を鍛冶場にいさせてくれればよかったのに 決して満足しなかったろうが、これに比べれば幸福だった！」(306)と叫んでしまう。この心中の叫びは、語り手ピップがマグウィッチに再会した直後の自分の思いを伝えたものである。しかしこの思いは、ピップがそれまでにマグウィッチから受けた恩義から判断すると、不当とも言えるものである。一方的であったにせよ、マグウィッチは天涯孤独を感じるピップを自分の「息子」(304)と考え、紳士になりたいというピップの望みを叶え、遺産相続の見込みまで与えているのである。ピップは、ミス・ハヴィシャムと結ばれていると信じていた間は、自分の生きる道を歩くかのように紳士生活を続け、自然の成り行きとして遺産を相続するつもりでいた。恩人がミス・ハヴィシャムなら、ピップはその恩人を受け入れるのである。それにもかかわらず、自分が囚人マグウィッチのごとき「ただの害虫」(303)に「縛りつけられて」(313)いることがわかると、ピップは自分の恩人に嫌悪を感じて、その恩人を拒絶するのである。このように考えると、先程引用したピップの心の叫びは、好き嫌いの激しい大人の、子供っぽい泣き言にしか聞こえてこないのである。

ここで注意したいのは、マグウィッチに再会した直後のピップを見つめる、語り手のピップが存在することである。「『大いなる遺産』は『デイヴィッド・コパフィールド』に見られる自己憐憫の気持ちが全く見られない。この作品は自分を理解するということを深く追求している。自己というものの判断においては仮借がない」(Johnson, 982)と言われるように、語り手のピップは、過去の自分を冷静で客観的な目で見つめている。

そして語り手ピップは、マグウィッチに嫌悪を感じ、予想できなかった真実を知って自分を哀れみ、第二の父親を拒絶した過去の自分の姿を告白しているのである。この告白は、ピップとマグウィッチの出会いから再会までに込められた、ディケンズの父親に対する思いを読み取る鍵となるはずである。

ピップがマグウィッチに再会するのは23歳のときである。ディケンズは、ピップと非常に近い年齢であった1834年(22歳)に、それまで一緒に暮らしてきた家族と別れ、ファーニヴァルズ・インと呼ばれる住居に移っている。そしてこの年までには、すでにディケンズは「ボズ」という筆名で、作家として人気を獲得しかけている。この頃まで、つまり父親から離れ、社会人として一本立ちする頃までのディケンズの父親に対する気持ちを確かめておくことは有意義であろう。

ディケンズは子供時代に、7歳のピップがいただいていたような天涯孤独感に近い気持ちをいただいていた。10歳以降に移り住んだロンドンでの惨めな生活と比べれば、幸福であったといえるチャタムでの生活においてさえ、ディケンズは家庭の中で寂しさを覚えていた。チャタムに住んでいた頃、ディケンズにとって父親はよい友だちであり、父子は連れ立ってチャタムやロチェスター、さらにチャタム周辺の田園へと散歩に出かけたり、ディケンズが後年住むことになるギャズ・ヒルの屋敷を父子で見上げたことがあったそうである(Wilson, 35)。しかし、ディケンズの親友ジョン・フォースターは『チャールズ・ディケンズの生涯』の中で、ディケンズがチャタム時代を指して、「余りかまってもらえなかった幼い頃」(Forster, 1: 10)という表現を使用したことを書き留めているのである。おそらく、10歳未満の幼いディケンズは父親と過ごす時間が少ないと感じていたのであろう。そして家族がロンドンのカムデン・タウンのベイアム通りにある家に移り、ディケンズがその家で家族と暮らしはじめてからは、ディケンズの孤独感は一層深まってしまうのである。金に困っている父親が、生活の問題を優先し、息子を十分かまっていられなかったと考えられるが、子供のディケンズにそのような家庭の事情まで斟酌できるはずもなかった。その当時のことを指して、ディケンズはフォースターに、同じ年頃の少年たちとは全く違う孤独な状態に落ち込み、家では全くかまってもらえない状態になってしまったことを、何度も話したという(Forster, 1: 12)。また子供の頃のディケンズが受けたいと心から願っていた教育に関して、父親は家庭の財政事情の悪化のためにすっかり忘れてしまったということや(Forster, 1:13)、1824年(ディケンズは12歳)における父親のマーシャルシー債務者監獄への収容に伴って、ディケンズが短期間にもせよ家族から切り離されて、一人でカムデン・タウンのリトル・カレッジ通りにある下宿で暮らさねばならなかったことなどが、ディケンズの孤独感をさらに深めてしまった。ディケンズは父親に関心を寄せてもらえなかったこの頃の孤独感を、『大いなる遺産』の冒頭場面で、ピップを通して伝えてい

ると考えられるのである。

ではピップがマグウィッチに対して感じる嫌悪感についてはどうだろうか。ディケンズは愛する父親がマーシャルシー債務者監獄に入れられたとき、金銭の使い方にだらしがなかった父親に対して嫌悪感をいだいたにちがいない。中流階級の家庭に育ったのだという意識のある少年のディケンズにとって、父親が囚人になってしまったという事実は、ひどい屈辱ともなったはずだ。父親の金銭面における無思慮はその後改められることがなく、息子の父親に対する嫌悪感は消えなかった。ディケンズは1830年から1831年の間（ディケンズは18～19歳）にマライア・ビードネルに出会い、強烈な恋心をいだいて求婚したが、その求婚は受け入れられなかった。この求婚にも、ディケンズの父親がかつて債務者監獄の囚人であったという事実が不利に働いたらしい（Ackroyd, 151）。そして1834年には、父親は再び借金のために逮捕されるはめになってしまった。ディケンズは父親に金を与えて救い出し、これを契機に父親と離れ、ファーニヴァルズ・インへ移り住んだのである。ピップのマグウィッチに対する嫌悪感も、マグウィッチがかつて囚人だったという事実に基づいている。ディケンズは、1834年に至るまで債務者監獄と縁を切れなかった父親に対する嫌悪感と、父親がかつて囚人であったときに覚えた屈辱感を、ピップのマグウィッチに対するそれに投影していると言ってもよいであろう。

このように見てくると、マグウィッチと再会したときのピップの気持ちに反映された、ディケンズの22歳頃における父親への思いも読み取れそうである。ピップの子供時代の孤独感は、ディケンズの少年時代の孤独感を表している。またピップが7歳から23歳になるまでの間のマグウィッチの不在は、ディケンズがふがいない父親の助力に頼らず、自力で成功をつかむまでの期間に対応しているだろう。23歳になるまでのピップにとって、マグウィッチは「自分にとって死んだも同然」（139）の存在であり、ピップはマグウィッチの助力で紳士になったのだとは夢にも思っていない。そしてピップのマグウィッチに対する嫌悪感は、ディケンズの父親に対する嫌悪感を表している。この流れに沿って考えてみると、ピップのマグウィッチに対する、あの泣き言のような心の中の叫びには、自力で人生の成功街道を歩きはじめたばかりのディケンズの、父親に対する子供っぽい抗議が込められている気がしてくる。これまで自分の力になってくれなかったのだから、今さらマーシャルシー時代の屈辱を思い出させるようなことをして、自分の足を引っ張ってくれるな、離れていてほしい、という抗議の声である。

次に、ピップが語るマグウィッチとの再会以降の部分から、ディケンズの父親に対す

る思いを探ってみたい。

マグウィッチはオーストラリアへ永久追放された身分であり、イギリスに戻ったことが発覚すれば死刑を免れない。マグウィッチからこの事実を聞かされたときの心情を、語り手ピップは次のように伝えている。

この事実だけで十分であった。この哀れな男は、何年間にも渡って、哀れな私に金や銀の鎖をどっさりとはぐらせたあとで、命をかけて私に会いにきたのだ。そのとき私はこの男の命を預かったのだ！もしも私が彼をひどく嫌うかわりに、彼を愛していたとするなら、もしも私が強烈な憎悪を感じて彼から尻ごみするかわりに、強固な敬愛と愛情によって彼に引きつけられていたとするなら、事態はこれほど悪くなっていなかっただろう。それどころか、事態はもっとましなものになっていただろう。もしもそのような気持ちを持っていたとするなら、彼を保護しようという思いが、自然に、優しく私の心に湧いてきただろうから。（307）

ピップにとって、マグウィッチが命を失うことまで覚悟して、「息子」（304）に会いにきたという事実は、あまりにも重たい。しかし上の引用の中では、そんな事実でさえ、第二の父親を名乗る男に対する敬愛の念や愛情に結びついていかなないのである。再会した翌日から、ピップはマグウィッチの身の安全を保つために奔走しはじめるが、その行動は、マグウィッチの運命を握っているのは自分であるという認識から生じた気持ち、つまり自分が原因になってマグウィッチを死なせてはならないという義務感にのみ基づいていると言える。

ところがピップのマグウィッチに対する思いは、海外への逃亡計画が失敗し、そのためにマグウィッチが重症を負ってしまったあとでは、大きく変わってしまうのである。語り手ピップは、死の運命を逃れられなくなったマグウィッチのそばにいようと決意した理由を、次のように説明する。

というのも今では、私の彼への嫌悪の念はすっかり消え去ってしまっていたからである。そして私は、追い立てられて傷つき、枷をはめられた人間の中に、私の手を握っているその人間の中に、私の恩患者になろうとしてくれた男、長い年月を通じ、変わらぬ愛情と感謝と寛大な心を私に対していだきつづけてくれた男の姿だけを見たのだった。（423）

この時点でピップは、マグウィッチが人知れず長年に渡って自分にしてくれたことを、好意として受けとめることができるようになっている。考えてみれば、ピップは善良な人間であり、はじめからマグウィッチに対して理解を示せるだけの素養を持っていたのである。このときに至るまで、ピップは善良なジョーを愛し、密かに友人ハーバート・ポケットに仕事を世話してやり、不幸な結婚をしようとしているエステラ・ハヴィシャ

ム（ピップの愛を受け入れてくれなかった女性）に、涙を流しながら、幸せになれるような結婚相手を見つけてくれと懇願し、また自分をだましたミス・ハヴィシヤムを許してきた。それゆえ、ピップがマグウィッチの善良性を理解できるようになること自体は、不思議なことではない。問題とされるべきことは、これまでピップがそうすることの妨げとなってきた原因（マグウィッチが卑しい囚人であったという事実）を取り除いたものは何か、ということである。

次の引用が、その問題を解く鍵になってくれるだろう。これはマグウィッチを含む32人の罪人たちが裁判官の前に引き出されたときのことで、裁判官がマグウィッチに死刑の宣告をした直後の法廷の様子を、語り手ピップが描写したものである。

太陽が法廷の大窓をさっと照らし、日の光が、ガラスの表面できらきら輝いている雨粒を突き抜けて、法廷内にさしこんできた。それは32人の者たちと裁判官との間を照らす一条の幅の広い光となって、両者を互いに結びつけた。その光景を見た法廷の聴衆の中には、32人の者も裁判官も、この世を去ってしまえば、全く平等に、すべてを知り、間違った判決をくだすことなど決してない神様の前へ進んでいくのだということを、思い出す者があつたであらう。（434）

上の場面においてピップは、あらゆる人々が死ねば平等となることを重く見ている。ピップのマグウィッチに対する思いを変化させたものは、この死に関する考えである。ピップは重症を負って息も絶え絶えのマグウィッチを見たとき、自分もマグウィッチも死んでしまえば同じ身分の存在となることを悟ったのであり、マグウィッチの自分に対する行為は神によって善行と判断されるということに気づいたのだ。そのことに気づいたからこそ、ピップは第二の父親を名乗るマグウィッチを受け入れることができたのである。

34歳のピップが語るマグウィッチに対する気持ちの変化は、ディケンズの父親に対する気持ちに、どのように対応するのだろうか。それがわかれば、物語に描きこまれた、22歳頃以降における、ディケンズの父親に対する気持ちもつかめることになる。ディケンズと父親との関係と照らし合わせながら、その問題について考えてみたい。

父親と別れて暮らすようになってからの1836年に、ディケンズは『ピクウィック・クラブ』（1836-37）を書きはじめた。この作品はディケンズに作家としての名声と栄光をもたらした。それ以後、1870年に亡くなるまで、ディケンズは精力的に執筆活動を行い、人気を保ちつづけていくことになる。公には、ディケンズは華々しい活動を送ったと言えそうだが、私的な面では父親に頭を悩ましていた。ディケンズは父親からたびたび生活費の請求を受けていたし、父親の方も借金ばかりしていたのである。このような父親に対して、ディケンズが憤りを感じなかったはずはない。それを示す例を一

つ挙げてみよう。ディケンズが『ニコラス・ニクルビー』（1838-39）を執筆している最中に、父親が破産手続きをしなければならぬような状況に陥った。その時、ディケンズは両親をアルフィングトンという町に引っ越させてしまった。アクロイドの『ディケンズ伝』によれば、ディケンズは父親に、ロンドンへ戻ってこないことを条件にして、四半期ごとに7ポンド10シリングの金を渡すことにしたそうである（Ackroyd, 297）。しかしこの一件に関しても、結局ディケンズが父親に金銭的援助を与えたことに変わりない。ディケンズは決して父親を見捨てることはなかったであろう。ディケンズが1845年から編集に携わりはじめた『デイリー・ニュース』誌のスタッフに父親を採用したという事実が、その証拠になる。ディケンズは父親に生活費を稼ぐための仕事を与えたのである。上に述べたことから判断すると、作家として名声を獲得してからのディケンズは、自分を頼ってくる父親に対して憤りを感じつつも、義務感から父親を援助していたと言える。ディケンズのこの義務感は、マグウィッチの保護のために奔走しだしたときのピップの気持ちに通じるものがある。

では、ピップのマグウィッチに対する気持ちの変化は、ディケンズの父親との付き合いの中の、どのあたりに対応するものなのであろうか。父親の死後、ディケンズは「私の可哀相な父親」という表現をよく使うようになったが（Ackroyd, 14）、その表現はディケンズが父親の死期の迫ったことを知った頃から、使われはじめている（例えば、1851年3月27日付けのジョン・フォースターへの手紙）。この点から見れば、ディケンズと父親の関係が改善されはじめるのは、1851年に父親が死を迎える直前だと考えて間違いない。ということは、ピップとディケンズは同じ時期に気持ちを変化させていることになる。そして実際に、両者の気持ちの変化のきっかけは同じである。ピップは死期の迫ったマグウィッチの中に善良な人間のみを見つけ出している。そしてディケンズも、死期の近づいた父親に対して、父親に対する複雑な思いの中から、憎しみや嫌悪の念の部分捨て去り、父親の良い面だけを見るようになるのである。そのような心境に達したディケンズの姿を、彼自身が父親の墓に「熱意があり、役にたつ、陽気な精神」（Forster, 2: 92）と刻んで、無条件に父親を讃えたという事実や、後年になってフォースターに「長生きすればするほど、私はますます彼が良い人間に思えてきます」（Forster, 2: 104）と語った事実から、読み取れるからである。ピップが第二の父親を受け入れた原因と、ディケンズが父親への憎しみを忘れることのできたきっかけは、どちらも強い絆で結ばれた人間の死なのである。敬虔なキリスト教徒であったディケンズは、ピップと同様に、父親の死に際して、神の前では自分も父も対等の立場の人間であり、どちらも誇るべき立派な人間であることに気づいたのだ。そしてそのことを、ピップの口を借りて語っていると思われるのである。

まとめ

ディケンズは、子供時代から『大いなる遺産』執筆当時までにいただいた父親への思いの変遷を、同作品に描きこみたかっと思われる。ディケンズは父親の臨終に立ち会っているが、すでに父親はディケンズがそばにいることに気づけないほど弱っていた。愛する父親に嫌悪の念をいだいてしまったことや、金銭面のだらしなさなどについて厳しい態度で咎めたことを、詫びる時間を持てなかったのである。ディケンズは『大いなる遺産』で、自分の父親に対する気持ちの移り変わりを素直に描き、今では心から父親を敬愛していることを示して、父親の霊を慰めたいと願ったのであろう。

引用文献

Ackroyd, Peter. Dickens. 1990. Londo: Mandarin Paperbacks, 1991.

Dickens, Charles. The Oxford Illustrated Dickens: Great Expectations. 1953. London: Oxford UP, 1978.

Dickens, Charles. Letter. The Letters of Charles Dickens. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson and Nina Burgis. Vol. 6. Oxford: Clarendon Press, 1988.

Forster, John. The Life of Charles Dickens. 2 vols. 1927. London: J. M. Dent and Sons LTD, 1980.

Johnson, Edgar. Charles Dickens, His Tragedy and Triumph. Vol. 2. New York: Simon and Schuster, 1952.

Wilson, Angus. The World of Charles Dickens. 1970. London: Panther Books, 1983.

出典：『イギリス小説ノ - ト』第11号（南山大学荻野昌利研究室、平成11年5月31日）pp.85-99.